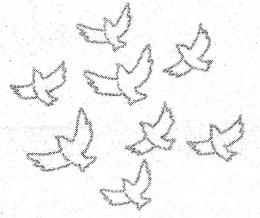


「平和大使として学んだこと」

平木のためにぼくたちがでるこ



流山市立流山北小学校 六年 氏名 青木 龍之介

「願うだけでは平和はおこれません。色あざやかな日常をすり、平和を作っていくのは私たちです」

これは、広島市平和記念式典でも代表の六年生、加藤さんと石丸さんの一平和への誓いーからぬき取、夫一節です。友達と仲よくしたり、違いを良きととらえて自分の考えを見直したり、人の話をよく聞くというような自分達にもできる小さなことで、平和へとつなが、ていきます。

ぼくは今年広島に行き、広島平和記念資料館に行きました。そこでは、昭和二十年八月六日のできごとが絵や写真や原爆によって形のゆがんだ日用品の展示で表されていました。皮ふが垂れ下がりがりながい無言で逃げける人や、原爆の後遺症によって病にかかり苦しんだ人の絵を見て、ぼくはこんなことが実際にあったなんて信じられないと思います、改めて原爆のおそろしさを感じました。

広島市平和記念式典では、広島市長の松井

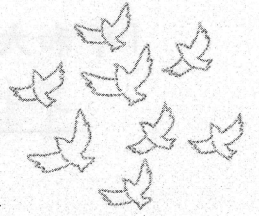
さんが、

「私たちは今こそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分別を融和へと歴史の潮流を転換させていかなければなりません」と言っていて、一つか二つは自分にもできることがあるなと思いました。

また、広島に行く前、ぼくは流山市長の井崎さんに会って会いました。そこで市長は、「戦争はすぐに始められるけど、とめることができない」と言っていて、ぼくはけんかや戦争は始める人も悪いけれど、すぐにやめることが大切なんだなと思いました。

ぼくが平和大使になつて一番おどろいたことは、原爆による熱線の温度です。太陽の表面温度が六千度、鉄が溶ける温度が千五百度ですが、原爆の落下中心地付近は三千度から四十度の高温だ、たえうです。それを聞いてぼくはこんなに熱い爆風や熱線がおよびてき、広島にいた人達は、亡くなつてしまつた

「平和大使として学んだこと」



小学校 年 氏名

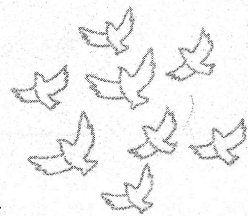
人も生き残、大人もとて苦しい思いをした
んだなと思いました。

今、被爆者が生き残っている人は八十歳以
上になっっています。なので原爆が落ちた時の
ことは忘るえしてしまうかもしれなせん。だ
から昭和二十年八月六日のできごとを、そし
て第二次世界大戦のことを、各地で行なわる
追悼式や慰霊祭をテレビで見たり、戦争体験
の伝承者の人から話を聞いたりと、なごをし
て、受けついでいくことが大切だなと思いま
した。

「平和大使として学んだこと」

平和のありがたさ

流山小学校 5年 氏名板津 将大



広島は、お母さんが子供の頃に八年間を過ごした場所です。お母さんの母校のがべはひばくしてかたむいていた、と聞いた事がありました。理由などはよく分かりませんでしたが、僕が広島をおとぎふたのは、二〇二四年三月以来の二度目です。三月に原爆資料館を回った時の感想は、正直に言うところ、怖かったです。広島は歴史、原爆の怖さを知らなかつた僕の目に飛び込んできたものは、こんなことになつた建物の写真、ひどい火傷に苦しむ人の姿やその人達が使っていたもの、着ていた服たちでした。どうして、これらがなぜ資料館にあるのか、という疑問の答えを、二〇二四年八月六日、二度目の訪問で、被爆体験伝しよう者の方のお話しを聞いて、よく知ることができました。また僕がうきまてから今までが、どれだけ平和で幸せだったかわかりました。

被爆体験伝しよう者のお話しの中で、一広

島を考へることは、核戦争を拒否することです。一広島を考へることは責任をかうことです。一大きな声でおっしゃっていました。僕ははじめ、とてもびっくりしましたが、お話しの後にはその思いが強いものであるベきだともわかりました。

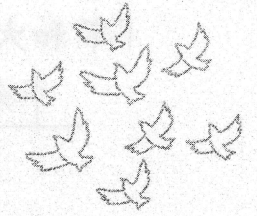
戦争時代の小中学生は勉強したくてもさせてもらえなくて、かわりに武器を作り、戦争に行くのために農作物を育てなければいけませんでした。食べた物も食べられず、空しくうから逃げるために親とはなれて暮し、寂しい思いをしていました。戦争が終わったなら、親がおむかえに来てくれると信じていたのに、親が亡くなっているところへ来てもらえませんでした。

放射線をあびて、染色体がこわれてしまい、辛い思いをして死んでしまった人がたくさんいたし、今も苦しんでいる人がいます。

もし今、日本で戦争が起きたら、僕たちの平和な暮らしも、将来も、夢も全てこわれて

「平和大使として学んだこと」

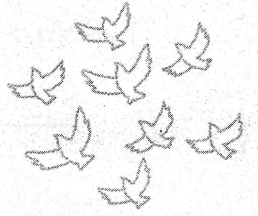
平和のありがたさ



流山小学校 5年 氏名板津 将大

てしまいます。僕たちが世界平和のために
きる事はな人でしょ、という質問の答えは
そう簡単には見つけられなかったけど、戦争
をしても絶対に平和にはならない。核戦争は
長い間人を苦しめ悲しませるだけだというこ
とがよくわかったので、その事を流山で周の
人たちに伝えていきたいです。
残念ながら、今もウクライナやイスラエル
では戦争が起きています。意見のちがいは武
力ではなく、話し合いをするべきです。みんなの
意見をもっと重視して解決できるようになって欲
しいです。

「平和大使として学んだこと」
平和のためにできること



西初石 小学校 5年 氏名廣庭 紗和乃

私は、広島を初めて訪れた。平和学習も学校の授業でやったぐらいで戦争のことも少ししか知らなかった。

被爆体験伝承者の方の講話では、はじめに「ヒロシマを考えることは核戦争を拒否することです。ヒロシマを考えることは平和に対して責任をとることです」とおっしゃった。

「平和に対して責任をとる」という意味は、私たちに平和のためにできることがあるという意味だと思う。平和記念資料館では、「平

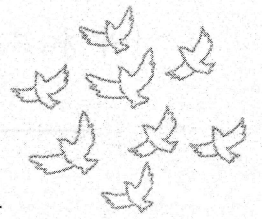
和に対して責任をとる」、その言葉がずっと頭に残っていた。しかし、被爆した実物の資料を見て、さっきまで考えていたことを思い出せなくなるほどこわくしておそろしかった。

そこには、当時の写真や被爆した弁当箱、三輪車、血がついたまくらや原爆で壊れた人か、町か、一瞬に破壊されていく動画があった。何にしり比べものにならないほどおそろしかった。広島国際会議場では高校生が描

いた「原爆の絵」が目にとまった。「首のついた赤ちゃん」というタイトルの絵があり、こわくて目をそむけた。会場には被爆者の方がいっぱいしゃがんでいた。とても幸せそうな笑顔だった。わたしは絵や資料を見ただけでこわくて目をそむけたのに、被爆者の方は実際に体験されている。だけど笑顔だ。その笑顔には、世界が平和になってほしい、という願いがあったと思う。

今、そしてこれから私ができることは三つある。一つ目は、平和大使として学んだこと人間として学んだことを友達や身の回りの人に伝えていくこと。前述のように、戦争や核兵器のおそろしさを知って考えることが「戦争はこわい、戦争をしたくない」と思うきっかけになると思うから。二つ目は、戦争や核兵器について、もっとくわしく知ること。広島のことだけでなく、他の場所でのできごともあり考えることが平和への道の一步だと思うから。三つ目は、友達や家族、身の回りの

「平和大使として学んだこと」
平和のためにできること



おおたかの森小学校 6年 氏名 関口綾香

私は、平和大使として広島へ行き、平和の尊きを学ぶ貴重な体験をしました。初めて訪れた広島は、緑豊かで、七十九年前に焦土と化し、七十五年間は草木も生えないと言われた場所とは想像できないほど栄えた街でした。しかし、今にも崩れ落ちそうな「原爆ドーム」は、本当に原爆が投下されたという事を私に語りかけているように感じた。

一日目は、被爆伝承者の細光さんが、爆心地から一・五キロメートルの自宅で被爆した岸田弘子さんの話をしてくれました。大やけどをした兄を助けるため、まだ六才の幼さで薬の代わりにきゅうりをすり下ろし続けたそうです。その後、平和記念公園で千羽鶴を献納しました。そこには、平和への願いが込められた沢山の千羽鶴があり、とてもきれいでした。資料館では被爆者の苦しみ、原爆の恐ろしさに心が締め付けられました。記録のために写真を撮ろうと思っていたのですが、カメラを向けられませんでした。

二日目の八月六日は、平和記念式典に参列しました。原爆が投下された八時十五分「黙とう」の号令で私は目を閉じました。鐘の音が鳴り響いた瞬間、この広島で学んだ事が頭の中で次々と映し出されました。熱線で全身を焼かれ皮膚がぼろ切れのように垂れ下がった人。水を求め川に押し寄せる生徒たち。目や腸が飛び出し赤・青・紫に変色した死体。激しい炎で焼き尽くされる街。この地獄のような光景に胸が張り裂けそうになり、いつの間にか涙がぼろぼろと流れ落ちていました。

私は、実際に広島へ行き自分の目で見た事で、広島の人たちの「原爆はあってはならないもの。戦争は繰り返してはいけない」という強い思いを感じました。そして、原爆の記憶を次世代へつなげようとしていました。なので、私にできる平和への取り組みは、平和大使として学んだ事を家族や友達に伝えていく事だと思いました。一人一人が平和の尊さを知り考える事が大切だと私は思います。

平和大使として僕にできること

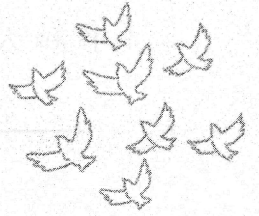
となのです。皆が平和にしたいという思いだ
けでは世界を平和にすることはできません。
だから皆一人一人が行動し、平和な世界を作
っていかなければいけないというのを改め
て感じました。また自分が正義で悪という考
え方をするから戦争が起きてしまうんだとい
うことを感じました。

広島は、今でもずーっと平和を維持するとい
う強い思いを持ち、ている人がたくさんいます。
第二の広島や長崎を作、てはいけないと言っ
ている声もたくさん聞きました。この先世界
を平和にするためにはどうすればよいのかとし
ようか。それは平和大使として今回体験した
ことを周りの人に広めていったりとか、身
近な人に親切にしたりするとか、こういう小
さなところから行動して、それを広めていくこ
とで世界を平和にすることにつながり、平和
大使としての役割なのだと思います。

「平和大使として学んだこと」

二度と起きてはいけないこと

おおたかの森小学校 5年 氏名 大田 悠貴



「平和大使」を終えた今、ぼくが強く思うのは、広島と長崎で起きたことが二度と起きてはいけないということ、このことを自分達がいろいろな人に伝えていかなければいけないということです。

昭和二十年八月六日八時十五分、広島に原爆が投下されました。熱線をやけどをおったり、爆風でたおれた建物の下じきになったり、多くの方がぎせいになりました。生き残れたとしても今もまだ後遺症で人々を苦しめています。

資料館には、被爆者の思いや言葉、遺品などがあって一発の原爆で金属も溶けて変形したり、真黒にこげてしまったものを見て鳥肌が立ちました。資料館を見学して、もう二度とこのようなことが起きてはいけないと感じました。

被爆体験伝承者のお話では、原爆の恐ろしさが伝わってきました。伝承者の方は、岸田さんという方の話をしてくれました。岸田さん

は、まだ幼かったので家の前で遊んでいました。しかし今と違い空襲警報がなった時すぐに家に帰れないため、遠くには行けませんでした。八月六日、岸田さんは、飛行機の音がしたので窓をのぞき、飛行機を見ようとしたが見えませんでした。その時でした。ドーンと大きな音とともに爆風がせまってきた。家をおそいました。岸田さんと家族は家の太い柱がたおれた物をおさえ、そこに偶然できた空洞にみんなが集まり、奇跡的に助

かったそうです。爆心地からはなれているのにいつ死んでもおかしくない状況だったことに強い恐怖を感じました。

ぼくは、平和大使として広島で戦争の悲惨さを実際に見て、聞いてきました。二度とこの悲げき起きないように、この経験をいろいろな人に伝えていくことが大切だと思います。